研究ノート

カトリック系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色

― 日本カトリック幼児教育連盟の横浜教区（神奈川・山梨・長野・静岡）に着目して ―

鈴　木　康　弘[1)]　　吉　田　直　哉[2)]　　安　部　高太朗[3)]

[1)] 八戸学院大学短期大学部
[2)] 大阪府立大学
[3)] 郡山女子大学短期大学部

How Do Catholic Ideals of Early Childhood Education and Care （ECEC）Feature in Nursery Schools and Kindergartens in the Japan Federation Catholic Schools of Yokohama Area （Kanagawa, Yamanashi, Nagano and Shizuoka Prefecutre）?

Suzuki Yasuhiro[1)]　　Yoshida Naoya[2)]　　Abe Kotaro[3)]

[1)] Hachinohe Gakuin Junior College
[2)] Osaka Prefecture University
[3)] Koriyama Women's College

抄録：本稿の目的は、カトリック系の幼稚園・保育所の保育・教育理念の特色を明らかにするものである。日本カトリック幼児教育連盟の横浜教区に加盟している56園を対象とし、これらの園が、Web サイト上で公開している保育・教育理念のテキストファイルを、計量テキスト分析の手法（KH コーダー）を用いて、分析した。

分析の結果、プロテスタント系の園と同様に、心や精神などの情操を重視する傾向が見出された一方で、カトリックという宗派性や文化に対する強調が見出された。園の理念のなかで用いられる「マリア」という言葉には、子どもに対するケア・保護のモデルとしてだけでなく、他者への感謝や愛情を表現することができる理想としての子ども像が示されていた。また、そのようなカトリック精神に基づく保護と子どもの能力を適切な方法で伸ばすのにふさわしい教育方法として、モンテッソーリ教育に取り組んでいる園も存在している。

キーワード：キリスト教、カトリック、宗教教育、聖母マリア、モンテッソーリ教育

1．本研究の目的と対象

本研究の目的は、カトリック系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色を、各園が Web サイトにおいて、どのように保護者や市民に向けて発信・提示しているのかを、KH コーダー（テキストマイニングソフト）を用いた計量テキスト分析の手法から明らかにすることである。今回、分析の対象としたのは、日本カトリック幼児教育連盟の横浜教区（神奈川・山梨・長野・静岡）に所属している56園の Web サイトである[1)]。

日本カトリック幼児教育連盟は、日本カトリック学校連合会に所属する連盟であり、カトリック幼稚園の充実を図り、幼稚園教育の振興に資することを目的として活動している団体である。日本カトリック学校連合会は、1956年に設立されたカトリック教育協議会としてはじまり、1974年に現在の名称とし

て組織改編がなされた。研究ジャーナルや新聞として、『カトリック教育』や『月刊カトリック教育新聞』等の媒体を発行している。なお、日本カトリック幼児教育連盟という現在の名称は、2016年以前は、日本カトリック幼稚園連盟という名称で活動していたものが、改名されたものである。日本カトリック学校連合会のWebページの「加盟校紹介 幼児教育連盟」によると、2019年現在、日本カトリック幼児教育連盟には、513園が加盟している。文部科学省の『学校基本調査』（平成30年度）によれば、日本の幼稚園の全体数は、10,474園であることから、そのうち、５％ほどが、カトリック系の幼稚園であることを示しているといえよう[2)]。

日本カトリック幼児教育連盟の加盟園にみられる宗教的な保育・教育理念は、各園が独自に定める保育の方針や特色ある教育活動を構想する基盤として位置づけられている。2017年に告示された保育所保育指針等では、「全体的な計画の作成」を、各保育所の保育の方針や目標を踏まえながら作成されることが求められている。宗教系の園は、教育課程や保育内容を構想するうえで、改めて宗教的な保育・教育理念に立ち戻ることが要請されているといえよう。

このような各園が策定に取り組む「全体的な計画」が、園内部の保育実践の基本枠組みを構成するものであるのに対し、本研究が着目するWebサイトは、園を利用する保護者や地域の市民に向けて発信される園の外部に向けた広報戦略の一環を担うものである。カトリック系の園は、どのような訴求性のあるフレーズを掲げながら、宗教的な教義を保持しようとしているのだろうか。

２．先行研究の検討

執筆者たちの共同研究では、これまでにも仏教系や神道系の保育所・幼稚園等の保育・教育理念（安部・吉田・鈴木 2018、安部・吉田・鈴木 近刊）、そして、キリスト教関連に着目したものとしては、プロテスタント系保育所・幼稚園等の保育・教育理念（鈴木・吉田・安部 2018）の特色に関する分析を、同様のアプローチを用いて取り組んできた。今回の論考では、特にプロテスタント系保育所・幼稚園等の保育・教育理念との比較を念頭に置きながら、カトリック系保育所・幼稚園等の保育・教育理念を語る言葉やフレーズの特徴の解明に取り組んだ。

先行研究については、次の三つを踏まえておく必要があるだろう。

第一に、カトリックやプロテスタント、仏教などの宗教系の学校に関する特徴の概要を論じているのが、橘木俊詔（2013）『宗教と学校』（河出書房新社）である。橘木は、日本における宗教系学校が帯びているブランド・イメージの類型を、それぞれの歴史的な発展の経緯に求めるとともに、宗教の布教・ミッションを掲げてきた学校が、なぜ進学やスポーツなどの世俗的な特色を打ち出すようになったかというメカニズムを論じている。しかしながら、橘木が論じているのは、小学校や中学校、高等学校が中心であり、保育所・幼稚園等に関する分析はなされていない[3)]。

第二に、日本の幼児教育のフィールドワークを海外の研究者の視点から行ったスーザン・ハロウェイ（2004）は、『ヨウチエン：日本の幼児教育、その多様性と変化』（北大路書房）のなかで、宗教系の保育所・幼稚園の事例分析に取り組んでいる。ハロウェイは、仏教系・神道系・キリスト教系（長老派・カトリック系）の特徴をそれぞれ論じるなかで、カトリック系の園の特徴を、欧米の教育理論を学ぶことに熱心な園長のイニシアティブのもとで、モンテッソーリ・メソッドを採用していること、そして、読み書きや算数を指導するカリキュラムに取り組んでいることの二点を指摘している。ただし、ハロウェイの指摘は、Webサイトが広く普及する以前の1990年代半ばの調査をもとにしたものであるのみならず、実際の保育実践の事例分析に基づくものであり、実践の背後にある保育理念や保育方針をことさら検討の対象にしているわけではない。ただ、ハロウェイの指摘を踏まえて本研究が担うべき課題は、フィールドワークを通じて読み解くことのできる教育方針や宗教性を含めた園の文化が、Webサイト上では、どのような言葉やフレーズを用いて翻訳・表現されているのかを明らかにするということである。

第三に、プロテスタント系の保育所・幼稚園等の保育・教育理念に関する研究に取り組んだ執筆者らの共同研究は、その特徴として、神や聖書の存在、宗教的な行事や礼拝に言及していること、そして、

身体よりも、心や精神に焦点化した保育目標を掲げていることなどを明らかにした（鈴木・吉田・安部2018）。宗教的理念を基盤に持つことが、カトリック系の園でも保育理念・方針という形で共通性となって表れるのか、あるいは宗教・宗派の違いが保育理念・方針にまで反映され、差異となって検出されるのかを明らかにすることが本研究の課題であるといえよう。

３．計量テキスト分析によるテキストの頻出語と共起ネットワーク図

日本カトリック幼児教育連盟の横浜教区（神奈川・山梨・長野・静岡）に所属している56園に焦点をあて、Web サイト上で公開されている理念や方針に関する文言をテキストファイル化し、計量テキスト分析（ソフトとして KH コーダーを使用）を行った。

次ページの表は、上記の計量テキスト分析の結果、テキストの頻出語（名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞など）の上位40語を示したものである。

テキスト全体の頻出語の傾向から読み取ることができるのは、次の四点である。

第一の特徴は、いわゆる情操教育との関連から、保育・教育理念が語られていることである。例えば、心・精神に関するフレーズ［心／こころ（出現回数 207回）や精神（48)］、他者との関係性［感謝(43）や思いやり（35)、友だち（35)、優しい／やさしい（30)、関わり（15)、気持ち（９)、助け合う（７)、愛し合う（８)、寄り添う（６)、思いやる（６)、仲間（５)］、自然や生命への感性［自然 (34)、命／いのち（29)、生命（４)、動植物（４)、地域（３)、小動物（３)、生物（２)、生き物（２)、動物（１)］などに対する言及の多さは、キリスト教全般に見られる特徴として指摘することができる。これらの心・精神は、友達など周囲の他者や、身近な動植物などの自然に向けられた、いわば環境へと向けられた配慮・愛着ともいうべき心的な姿勢である。

第二の特徴としては、キリスト教やカトリック教会における宗教的な理念が、一般的な保育所・幼稚園等で掲げられている理念や活動［生活（69）や遊び（40)、遊ぶ／あそぶ（29)、学ぶ（29)、活動(26)］と矛盾しないものとして打ち出されていることである。教育基本法（２）や学校教育法（10)、幼稚園教育要領（３）に言及しながら、日本国内の法令やガイドラインに従ったものであること、それらがキリスト教やカトリックの精神と矛盾しないものであることが強調されている[4)]。これは、カトリックの教義ないし思想に基づいた保育が、世俗化された近代的教育・保育理念と共通する普遍的なものであることの主張の表れであるといえよう。

第三の特徴として、キリスト教のなかでも、カトリックの宗派であること［カトリック（45)、キリスト（31)、キリスト教（24)］を打ち出していることである。プロテスタント系の園は、個別の宗派名を打ち出すのに対して、カトリック系の園は、カトリックとしての集合的なアイデンティティを有していると捉えることができよう。これに関連して、神やイエス、聖人やその言葉に対する言及［神（55)、神様／神さま（55)、イエス（28)、マリア（11)、ヨ

表　保育理念・教育方針等に関するテキスト全体の頻出語（40語）

順位	頻出語	語数	順位	頻出語	語数	順位	頻出語	語数	順位	頻出語	語数
1	子ども／子供	224	11	神	55	21	感謝	43	31	基づく	34
2	心	201	11	神様／神さま	55	22	子	41	31	環境	33
3	教育	190	13	人間	54	23	遊び	40	33	モンテッソーリ／マリア・モンテッソーリ	33
4	自分	122	13	幼児	54	24	成長	39	34	育む	32
5	人	113	15	愛	53	25	基礎	37	35	キリスト	31
6	大切	109	16	精神	48	26	考える	37	36	育つ	31
7	生活	69	16	豊か	48	26	一人ひとり／ひとりひとり	36	37	社会	29
8	育てる	66	18	カトリック	45	28	生きる	35	37	学ぶ	29
9	幼稚園	63	19	友達／友だち	47	29	思いやり	35	37	思う	29
10	保育	62	20	愛す	45	29	自然	34	40	力 など	28

ハネ（7）、マルコ（2）、ドン・ボスコ（2）、パウロ（1）］や、宗教行事や礼拝に関するフレーズ［お祈り／祈り（21）、祈る（19）、教え（17）、教会（10）、福音（8）、クリスマス（3）、聖書（5）、信仰（1）、ミサ（1）、聖歌（1）、賛美歌（1）］などのキリスト教に関連する用語のなかにも、カトリック教会に特徴的な用語が含まれている。

第四の特徴は、モンテッソーリ教育［モンテッソーリ（26）、マリア・モンテッソーリ（7）、おしごと（4）］に関する人名・教育方法が、数多くの園で提示されているということである[5)]。

以下の図は、テキスト全体の頻出語がどのような関係のもとで用いられているのかを示した共起ネットワーク図である。円の大きさは、出現回数の多さを、距離の近さや線の太さなどは、関係性や結びつきの大きさを示している。これらのネットワーク図からは、子どもの教育は、心や精神などの目に見えない心的・内的なものを涵養することだと捉えられており、これは、プロテスタント系の園の理念にも見出された傾向であった（鈴木・吉田・安部2018）。

以下では、特にプロテスタント系の園と比較した際の、カトリック系幼稚園の保育理念・教育目標における特徴的な語彙として示された「マリア」と「モンテッソーリ」の二つに着目しながら、その具体的な文例に関する考察を加え、保育理念・方針の抽出を試みたい。

4．カトリック系の幼稚園の理念の特徴的な語彙（1）：「マリア」

本節では、カトリックに特徴的な語彙である「マリア」をキーワードとして、具体的な文例やコンテクストに即しながらその用いられ方について考察する[6)]。「マリア」という言葉は、今回の分析では、全体で12回の出現にとどまっているが、園名に「マリア」が掲げられた園が、8園、「聖母」と名がつく園は、13園

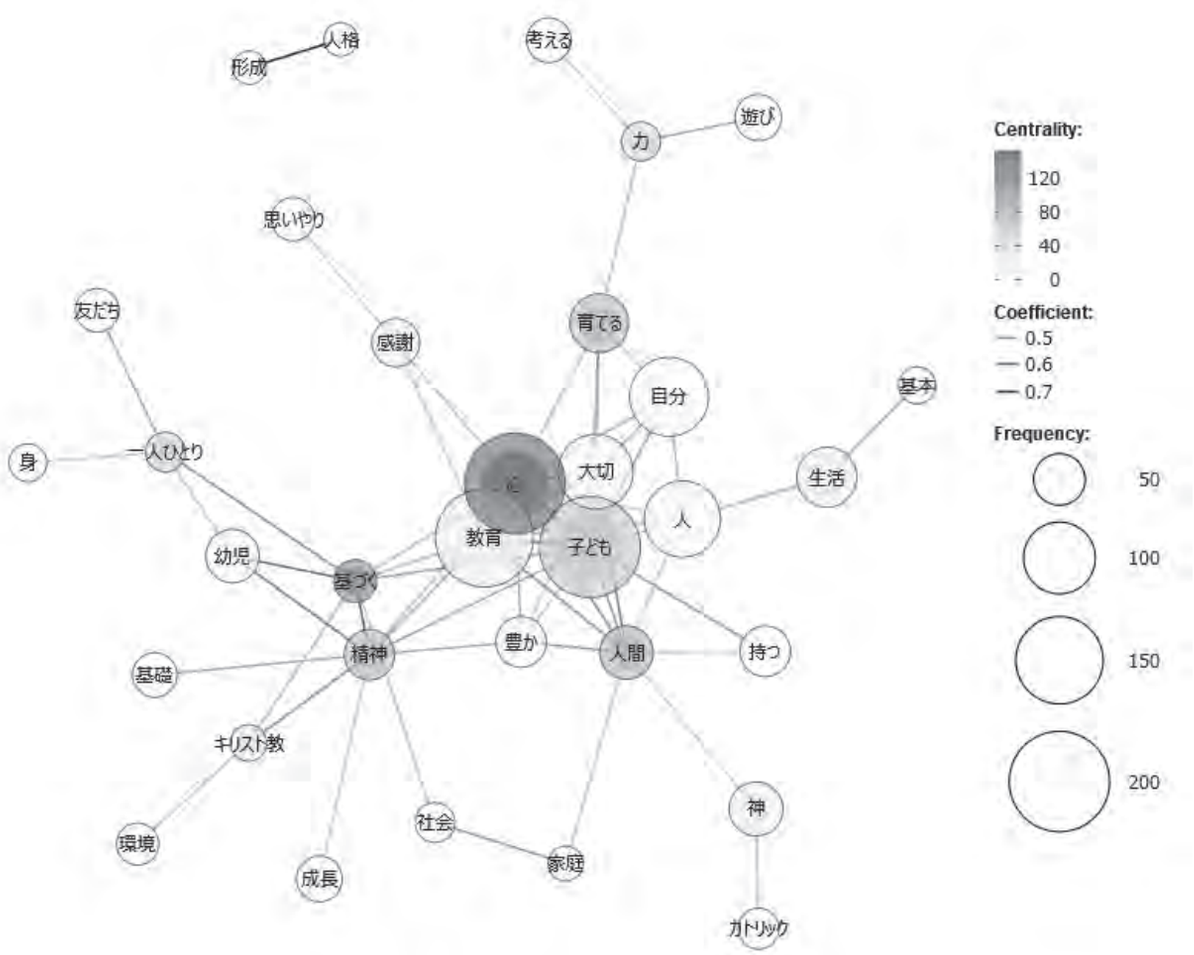

図　テキスト全体で用いられた頻出語を中心とするネットワーク図［単位：文章］

存在していたことに注意する必要があろう[7)]。

カトリック系幼稚園の保育・教育理念における「マリア」という言葉の用いられ方は、主に「子どもたちを守る存在としてのマリア」と「規範・モデルとしてのマリア」の二つに分類することができる。

「子どもたちを守る存在としてのマリア」の用例は、横浜市の鍛冶ヶ谷カトリック幼稚園における「Vision」と「園児のミッション」のなかに示されている。「聖母マリアの保護のもとに安心できる環境の中で、子どもたちは、祈る心、思いやる心、感謝する心、何事にもくじけない強い心を育みながら、のびのびと自己を表現し、創造性豊かな子どもに成長します。」（鍛冶ヶ谷カトリック幼稚園）や「園児のミッション　ぼくたち、わたしたちは、イエス様マリア様に守られて、すすんでお祈りをします。」（同）という用例のように、聖母マリアに守られるという感覚は、子どもたちの内面的な成長や信仰心の涵養をもたらす培地のような基本的条件として位置づけられている。言い換えれば、聖母マリアは、母性的な優しさや安心を与える抱擁・受容のシンボル（慈母としてのマリア）であり、成長の基盤となる大切なものと位置づけられているといえよう。子どもを取り巻く庇護的環境に充溢するマリアによる保護は、いわばこれらの園におけるメタ環境なのである。

もう一つの「規範・モデルとしての聖母マリア」の用例は、静岡サレジオ幼稚園と川崎市の聖クララ幼稚園の保育・教育理念のなかに見られる。

静岡サレジオ幼稚園は、三つ掲げている教育方針の一つに、「感謝する心をもった素直で正直な子ども」を掲げているが、その下位項目として、「聖母マリアをモデルとする」（静岡サレジオ幼稚園）という文言が提示されている。つまり、ここでは、マリアは「感謝する心」を持った「素直で正直」な模範的存在として位置づけられている。また、聖クララ幼稚園の教育目標は、「私たちすべての父である神、神の御ひとり子イエス・キリストの生涯と聖母マリアを紹介し、感謝と信頼、特に祈る心を育てる」（聖クララ幼稚園）とされている。ここでも、マリアは何より「感謝」する存在なのであり、マリアのこの側面に子どもたちに注目させることにより、子どもたちの内面に「感謝」の心を育てようとしていると言えよう。この二つの園の用例のなかで示された聖母マリアとは、誠実・真摯な心を持った模範的存在、いわば子どもの成長のモデルとして位置づけられているのであり、それらの模範的な心的姿勢は、マリアという具体像を持って子どもたちに提示されることにより、子どもたちの内面に摂取されていくと捉えられているのである。

以上で確認してきたような「マリア」に対する言及は、カトリックとプロテスタントの大きな違いでもある。プロテスタント系園においては、「マリア」に対する言及は見られなかった。保育のなかのマリア信仰は、カトリック系の園において、保育におけるケアの理念や人としてあるべき姿を語る象徴であり、いわば規範の人格化・具現化であると言えよう[8)]。

5．カトリック系の幼稚園の理念の特徴的な語彙（2）：「モンテッソーリ」

計量テキスト分析の結果、カトリック系の園の保育・教育理念のテキストのなかには、「モンテッソーリ」というキーワードは、全56園のうち、約3割の17園に登場しており、モンテッソーリ（26）とマリア・モンテッソーリ（7）を合わせ、33回登場していた。

以下では、「モンテッソーリ」というキーワードは、どのように用いられているのか、具体的な文例とともに確認してみたい。

第一の用例は、「能力を伸ばす教育としてのモンテッソーリ」である。磐田聖マリア幼稚園は、モンテッソーリ教育を、自立と自信を獲得するための保育・教育理念として発信している。

> 「人格形成の土台となる大切な幼児期に、できる限り良い環境を準備し与えたいと希望している当園では、モンテッソーリ教育の方法を実践することにより、幼児期の「人格形成」という大きな目的と役割を果たそうと考えています。モンテッソーリ教育法では、子供たちがもっとも効果的にしかも簡単に学べる方法、即ち、自分で物事をやってみるという方法により、さまざまなことを習得し、そして自立と自信とを培っていきます。」（磐田聖マリア幼稚園）[9)]

このような「モンテッソーリ教育を通じて、子ど

もたちの能力や可能性を引き出す」という語りのパターンは、「具体的に、モンテッソーリ教育を通して、子どもが持っている可能性を引出し、伸ばすこと」（湘南白百合学園幼稚園）や「モンテッソーリ教育の理念に基づき、一人ひとりにまかれた種を開花させるよう、内からの育ちを援助します」（カリタス幼稚園）のような他の園でも確認することができる。それは、新玉幼稚園による「また、マリア・モンテッソーリ（1870～1952）の教育法を一部取り入れ、一人一人の個性を伸ばしながら、社会性、集中力を身につけ、主体性、創造性豊かな子どもを目指します。」（新玉幼稚園）という方針にも見出すことができるだろう。子どもの内面に「能力や可能性」を見いだし、それを伸張させること、その成長を促す援助的な関わりがモンテッソーリ教育の本旨であると捉えられている。「子どもの可能性を引き出す」という教育的な言説は、保護者のニーズを満たすものであると同時に、強い訴求力を有していることを示しているように思われる。

第二の用例は、「モンテッソーリとその教育論に関する説明・解説」である。上述のモンテッソーリ教育に関する記述が、現在の教育効果やその意義が中心であったのに対し、モンテッソーリという人物やモンテッソーリの開発した教育方法に関する理念や教材に関する説明もなされている。

特に注目したいのは、モンテッソーリの開発した教具教材を介した子どもたちの活動の意義について解説を加えていることである。藤沢市の湘南白百合学園幼稚園は、「おしごと」という教具・教材の意義を、主体性や人格形成と結びつけて、次のように説明している。

> 「子どもの発達段階には、敏感期と言う時期（生まれながらに、備え持った能力を発揮する限られた時期）をとらえ敏感期に見合った「おしごと」と呼ぶ、教具教材の活動に出会うことにより現れる集中現象は、子どもの欲求が満たされ、主体的に行動でき、人格形成の基礎となると言われてます。」（湘南白百合学園幼稚園）

同様の事例としては、岡谷市の聖母幼稚園とヤコブ幼稚園も、モンテッソーリ教育を、「子どもが生まれながらに持っている人間の可能性と内なる能力を、十分に伸ばせるように援助するという考え方のもと、子ども達は日々好きな“おしごと”を自分で選び、集中し、完成させる一連の活動を通して心と体を育んで行きます」という同じ文章を用いて説明しており、モンテッソーリの開発した教具・教材を介した子どもたちの活動が、心身の成長をもたらすことが述べられている。「おしごと」を子ども自らが選択するということ、そしてその「おしごと」に、内面的統一を保ちつつ「集中」するという沈潜・没頭的状態が、子どもの自己発揮、能力開発に大きく資すると考えられていることが読み取れる。

「おしごと」と呼ばれる教具教材を介した子どもの活動、言い換えれば、子どもとモノとの相互作用の必要性は、モンテッソーリの「敏感期」という概念と強く結びついている。岡部聖母幼稚園が、モンテッソーリ教育のあり方を、「子どもの敏感期のエネルギーと知性のエネルギーを上手に統合し、感情豊かな心と自信に満ちた子どもを育てる教育法」（岡部聖母幼稚園）と説明しているように、子どもの敏感期は、可塑性に満ちた発達的に重要な時期であるという考え方が、共有されているのである。そして、その「発達」とは、何より人格形成に直結するものとして捉えられているのであり、単に知的能力、手指の運動の巧緻性の向上だけが目指されているのではないことにも留意する必要がある。

第三の用例は、「モンテッソーリ教育と宗教教育のつながり」についての明示である。聖リゴリオ学園が運営する諏訪聖母幼稚園と茅野聖母幼稚園は、「モンテッソーリ教育と宗教教育を特徴とした教育」（諏訪聖母幼稚園・茅野聖母幼稚園）とＰＲしているように、モンテッソーリ教育と宗教教育の二つの柱を教育内容の特徴をアピールしている。この二つの幼稚園は、「一人ひとりが生まれながらに持っている力を導き出す」（諏訪聖母幼稚園・茅野聖母幼稚園）というキリスト教的な精神に基づく子どもの成長を、モンテッソーリ教育によって達成しようとする考え方を有しているのだ。つまり、そこで共有されている子ども観とは、子ども一人一人が個性を持った存在であるということ、そして、その個々の子どもは、「生まれながらに」能力を備えた存在であるということ、の二点を特徴としている。モンテッ

ソーリ教育の理念や方法は、宗教教育と相反するものではなく、個々の子どもの内的能力の開発を援助・促進することを理念とするという点で共通しており、それゆえに、モンテッソーリ教育は、カトリックの精神にふさわしい教育方法として受容されているのである[10)]。

第四の用例は、「モンテッソーリ教育における家庭性やケア」に関する言及である。子どもの活動を重視するモンテッソーリ教育に基づく教育方法は、幼少期の子どもに対する適切な援助や配慮などのいわゆるケア的な側面からも意義のあるものとされる。例えば、静岡県藤枝市の藤枝聖母幼稚園は、それらのケア的な要素を「安心感」や「喜び」、「家庭的な雰囲気」といった言葉を用いながら、モンテッソーリ教育の考え方と結びついていることを論じている。

> 「本園に学ぶ幼児は、社会のルールを身につけながら、神様からも友だちからも、先生からも愛されているという深い安心感と喜びを感じながら、家庭的雰囲気の中で、心の豊かな人間になることを目指しています。基本的にはモンテッソーリ教育の考え方を取り入れています。」（藤枝聖母幼稚園）

ここで述べられている「家庭的雰囲気」とは、子どもの心身の発達のための適切な支援や援助を支える環境のことを含意しており、前章で言及した「子どもたちを守る存在としてのマリア」の用例と類似したものである。モンテッソーリ教育の方法にみられる、子どもの自立を支えるケア（保護）を重要視するという保育理念は、カトリック系幼稚園における聖母マリアの存在をイメージさせるものであり、両者は保護、あるいは愛護という点において共通している。それゆえに、モンテッソーリ教育とマリアのそれぞれが、カトリック系の保育を構成する重要なキーワードとなっているのであろう。

以上のように、必ずしも宗教的要素が濃厚だとは言えないモンテッソーリ教育が、日本においては、カトリックの教義に相応しい幼児教育として受容・普及されていることの一端が示されているといえよう。「モンテッソーリ」という保育方法上のシンボルは、宗教的あるいは非宗教的にも好意的に受け取ることができるものであり、現在もなおオーソドックスな幼児教育を支えるブランドとして強い訴求力を有していることがわかる[11)]。つまり、「モンテッソーリ」は、宗教上の教義に基づく保育理念を、世俗的な保育理念として翻案する際のよりどころとなっているのである。

6．分析結果と今後の課題

本研究で明らかになったことは、次の通りである。カトリック系の園がWebサイト上で発信している保育・教育理念は、キリスト教の他宗派であるプロテスタント系の園の保育・教育理念と同様に、「心」や「精神」に焦点化した保育目標を掲げていた。それらの「心」や「精神」は、身近な他者や動植物に対する親愛だけでなく、超越的自然ともいうべき、目に見えないものに対する畏敬でもあった。ただし、カトリック系の園は、キリスト（31）やキリスト教（24）というフレーズよりも、カトリック（45）という言葉のほうが出現回数は高く、他の宗派との違いを打ち出そうとする傾向がみられた。そして、聖母である「マリア」という言葉が、その出現回数は少ないものの、子どもに対する保育者のケア・保護の範型としてだけでなく、周囲の他者に感謝や愛情を持ちつつ誠実に接することができるという子どもの発達上の理想像をも含意しており、カトリック系の園の保育理念・子ども観に特徴的なキーワードであることが確認された。「マリア」が示すような保護的・愛護的な心的姿勢、感謝を保ち続ける謙虚さなどは、子どもに示すべき規範のモデルとして位置づけられている。

加えて、カトリック系の園の約３割が、モンテッソーリ教育に言及しているというのも特徴であった。モンテッソーリ教育への言及のバリエーションには、子どもの能力を適切な方法で伸ばすという世俗的なものと、カトリック的な精神、具体的には、聖母マリアによる保護を示唆するような宗教的なものが存在している。モンテッソーリというワードは、カトリック系の園にとって、世俗性と宗教性のどちらの領域に対しても訴求力・発信力のある教育方法のシンボルであることが改めて読み取ることができるだろう[12)]。

注

1）この地域区分は、カトリック中央協議会のカトリック横浜教区（神奈川県、静岡県、長野県、山梨県）に対応しているものと考えられる。なお、横浜地区の加盟園は、保育所・園、NPO団体は存在せず、設置形態が幼稚園もしくは認定こども園であった。

2）http://www.catholicschools.jp/member/kindergarten.php 2019年２月27日閲覧。
なお、これらカトリックの連合会および教育連盟に関連する団体として重要なのが、日本のカトリック教会および修道院を管轄している宗教法人組織のカトリック中央協議会である。このカトリック中央協議会の組織には、日本カトリック学校教育委員会が設置されており、カトリック中央協議会・日本カトリック学校教育委員会編（2009）『今、カトリック学校教育に求められていること』（カトリック中央協議会）およびカトリック中央協議会・日本カトリック学校教育委員会編（2011）『キリスト教理解のために：カトリック教育にかかわるすべての人に』（カトリック中央協議会）が発行されている。前者は、「日本カトリック学校としての自己点検評価基準」を含めた園の経営・管理のための文書をまとめたもので、後者は、「カトリック学校に勤務する教職員が学ぶためのテキスト」として編纂されたものである。

3）楠木と同様に、佐藤八寿子（2006）『ミッションスクール：あこがれの園』（中公新書）は、キリスト教系の学校、いわばミッションスクールが、歴史的に、欧米文化や都市文化を体現する発信基地として、富裕層のイメージで語られてきたことを論じながら、その優位性が失われた現在もなお、国際化や外国語への志向性という形でかつての立身出世主義が残り続けていること、そして、文学やサブカルチャーのなかで、特異な少女像が消費されつづけていることを指摘している。ただし、幼稚園や保育所等についての分析・言及はなされていない。

4）具体的な用例としては、「見えない神を畏敬する信仰心によって幼稚園教育要領をつつみ、園児がしっかりした人格の基礎を身につけるように努めている。」（聖クララ幼稚園）や「「幼稚園教育要領」に準拠し、健康・人間関係・環境・言葉・感性と表現の５つの領域を相互に関連付けキリスト教の理念をベースに、総合的に指導します。」（新玉幼稚園）などを挙げることができる。

5）鈴木・吉田・安部（2018）によるプロテスタント系の園の保育・教育理念の分析では、「モンテッソーリ」というキーワードは出現していない。

6）カトリック教会やカトリック系の幼稚園にとって、聖母マリアは、信仰におけるシンボリックな存在と位置づけられている。1962～1965年にかけて、カトリック教会の現代化を目的として開催された第二バチカン公会議は、宗教的な公文書である第２バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会編（2013）『第二バチカン公会議公文書：改訂公式訳』（カトリック中央協議会）を刊行しており、そのなかの「教会憲章」においても、「キリスト教の神秘のなかの神の母、聖なる処女マリアについて」という節が設けられており、カトリック教会としての聖母マリアの公式な見解が示されている。

7）その他では、神奈川県大和市のスミレ幼稚園のように、「マリア祭」（スミレ幼稚園）という用例が確認された。

8）なお、カトリック教会で聖人とされている「ヨハネ」は、福音書の名として７回登場している。運営母体の系列園が同じ理念を掲げているため、どれもヨハネの福音書13章34節の「互いに愛し合うこと」（諏訪聖母幼稚園・茅野聖母幼稚園）、そして、「わたしがあなたがたを愛したようにあなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネの福音書13章34節）（カトリック幼稚園・小諸市の暁の星幼稚園・聖マリア幼稚園・吉田マリア幼稚園・聖ヨゼフ幼稚園）というフレーズからの引用であった。「互いに愛し合うこと」の大切さを市民や保護者に伝えるうえで、上述のヨハネの福音書13章34節のフレーズは、カトリック教会のなかで広く知られている代表的な聖句として位置づけられていることがわかる。

9）類似の用例として、諏訪聖母幼稚園のものが存在している。「聖リゴリオ学園では、教育の一環としてモンテッソーリ教育を取り入れています。善良な人格形成と、良い生活習慣の基礎作りができるように、また、自主性・協調性・思いやりのある、強くたくましい心身を持った子供に成長できるよう、モンテッソーリ教育と宗教教育を特徴とした教育を行なっています。」（諏訪聖母幼稚園）

10）ただし、モンテッソーリ研究者である前之園（2002）が指摘するように、モンテッソーリの理論的な視座は、カトリックからの批判とともに構築されたものである。

11）このような観点からのモンテッソーリ教育への着目は、2016年のプロの将棋の最年少勝利記録や翌年の2017年の最多連勝記録更新によって、藤井聡太四段（2019年２月現在、七段）のブームをきっかけに改めて注目を集めたことでも知られる。近年、海外の著名人やIT起業家たちが、モンテッソーリ教育を受けていたとするメディア報道も相まって、その後、モンテッソーリ教育に関連するさまざまな書籍が出版されている（森 2018）。神奈川県葉山町のあけの星幼稚園でも、近年のモンテッソーリ教育のブームに言及しながら、「米マイクロソフト創業者のビル・ゲイツ、フェイスブック創業者のマーク・ザッカーバーグなどの世界的な著名人も幼児教育として「モンテッソーリ教育」を学んだことで知られています。さらに、前人未到の最多連勝記録を達成した藤井聡太四段も、子どもの感性や自発性を尊重する「モンテッソーリ教育」を取り入れていた幼児教育を学び、並外れた集中力を育んだと言われています。」（あけの星幼稚園）と、その教育効果に関する説明がなされている。

12）最後に、今回は検討を深めることができなかった課題を提示しておきたい。カトリック系の幼稚園とモンテッソーリ教育の関係を考えるうえで重要なのは、養成システムとの結びつきである。1967年に上智大学の研究者グループを中心として日本モンテッソーリ協会が結成されて以来、上智大学や学研の通信教育などを拠点に、モンテッソーリ教員養成コースが開講されてきた。今回の分析では、このような養成校におけるネットワークという存在が、保育者人材の供給を通じて、各地域の園の保育・教育理念の選定

とどのように結びついているのかというメカニズムまでは解明することはできなかったが、今後、研究すべき重要な課題であるように思われる。

参考文献

安部高太朗・吉田直哉・鈴木康弘（2018）「仏教系保育所・幼稚園における保育・教育理念の特色：東京都内の日本仏教保育協会加盟園のウェブサイト分析から」『敬心・研究ジャーナル』第２巻２号、11-21頁。

安部高太朗・吉田直哉・鈴木康弘（近刊予定）「神道系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色：全国神社保育団体連合会の九州ブロックにおける加盟園を事例として」『敬心・研究ジャーナル』第３巻１号。

カトリック中央協議会・日本カトリック学校教育委員会編（2009）『今、カトリック学校教育に求められていること』カトリック中央協議会。

カトリック中央協議会・日本カトリック学校教育委員会編（2011）『キリスト教理解のために：カトリック教育にかかわるすべての人に』カトリック中央協議会。

佐藤八寿子（2006）『ミッション・スクール：あこがれの園』中公新書。

鈴木康弘・吉田直哉・安部高太朗（2018）「プロテスタント系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色：神奈川県を事例として」『敬心・研究ジャーナル』第２巻２号、23-33頁。

第二バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会編（2013）『第二バチカン公会議公文書：改訂公式訳』カトリック中央協議会。

橋木俊詔（2013）『宗教と学校』河出ブックス。

日本モンテッソーリ協会（学会）編（2017）『日本モンテッソーリ協会（学会）50年のあゆみ：昨日、今日そして明日へ』日本モンテッソーリ協会（学会）。

ハロウェイ（2004）『ヨウチエン：日本の幼児教育、その多様性と変化』（高橋登・南雅彦・砂上史子訳）北大路書房。

前之園幸一郎（2002）「モンテッソーリ教育における宗教性とカトリックからの批判をめぐって」『青山學院女子短期大學紀要』（第56号）、45-64頁。

森健（2018）「モンテッソーリ教育の実力を探る」『文芸春秋』（第96巻３号、2018年３月）、290-299頁。

受付日：2019年４月15日